

## 墓じまい事情

新田由紀子

鎌倉の義妹が田舎の墓じまいをすると言う。百歳で大往生を果たした義母の葬儀の時だ。それを聞いて頭が混乱した。今ここに大正昭和平成令和を生きた義母が魂となって天へ旅立つところだ。この世に残すお骨はお墓に納めねばならない。墓所は岐阜の片田舎にあって、二十年も前に亡くなった義父のお墓がある。墓石には義母の名も、生前墓名として赤く彫られていると聞いている。その思い入れの深いお墓を片付けるといふのだろうか。

よく聞くと、墓じまいは義母の遺言だとのこと。いつかはしなければと思いつながら老い果てた母が、最後まで一人で同居してくれた娘に託した仕事だった。墓じまいという言葉は最近よく聞くようになった。しまう理由はどこも同じようなものだろう。墓所が現世代にとって馴染みのない遠方にある。現地の親類・縁者とは疎遠だ。維持管理が負担で、墓は荒れる一方である。つまり、現地との関係性が少なければ、墓所を現世代の生活圏に移すか、先祖の墓もろとも撤去してなくしたい、ということだろう。

田舎は岐阜県加茂郡東白川村神土という所で、義母の実家がある。村の中央を清流白川が流れ、茶畑が点在する美しい村だ。役場前に代々の医家天佑館がある。跡継ぎを得るべく、長女に婿養子を迎えたが子はなく、加子母村の縁戚からこれまた養女を迎えた。これが義母である。その後、天佑館に何かの縁で東京から青年医師が来て養女である義母と結ばれ、私の亡夫と義妹が生まれる。義父も一男一女もなぜか天佑館を継がず、東京に移り鎌倉に居を構える。以来縁と恩のある神土の村人が、高塀を巡らし清流を引いた池のある家屋と墓所の手入れをしてきた。縁者も代替わりした昨今、天佑館の恩に連なる世代も消えつつある。

墓じまいに先立って詣でた墓所は、檜林と赤い実をつけたアオキに囲まれてぽっかりと青空を仰ぎ、苔むして傾いた先祖十墓の墓石は、晩秋の風に吹かれて黙然と時を紡いでいた。